愛知教育大学研究報告，51（人文・社会科学編），pp. 55～63, March, 2002

日本におけるキリスト教宣教の歴史的考察 I

黒川知文
Tomobumi KUROKAWA

社会科教育講座

序

キリスト教が日本にもたらされて，450年を越えようとしている。しかし，現在，日本におけるキリスト教人口は１％未満にすぎない[1]。キリスト教の日本宣教は敗北していることを認めざるをえない状況になっている。

1999年11月に実施された石井研二氏の調査によると日本人のキリスト教に対する評価は，「非常に信頼する」「まあまあ信頼する」が29.7％であったのにたいして，「あまり信頼できない」「まったく信頼できない」が36.6％であり，「わからない」が33.8％であった[2]。（図１参照）

仏教にたいする信頼は60.9％，神道にたいする信頼は42.2％であり，日本人は仏教をもっとも信頼しており次いで神道，そしてキリスト教になることがわかる。キリスト教が「わからない」とした割合はもっとも高い。日本人にとって，キリスト教は，まだまだ信頼できず，また，わからない宗教なのである。そのことは宗教団体のイメージに関するアンケートの結果からもわかる。キリスト教に対するイメージが「特別ない」は47.1％もあり，「神秘的」と答えた者が10.6％もいた。（図２参照）

わからず，信頼できず，神秘的な宗教―これが，今日の日本人が，キリスト教に対してもつイメージであるといえよう。

ところで，日本のキリスト教徒の比率が少ない理由として，これまで，いくつか提示されてきた。隅谷三喜男は，「日本のキリスト教はいわば『いばらの地に落ちた』種であり，『いばらが伸びて，ふさいで』来た」と論じて，社会にたいする教会の責任が十分でなかったとしている[3]。小野静雄は，日本のキリスト教徒が天皇制国家とのきびしい対立を避けて，妥協してしまったことが，福音の歪曲を結果としたと論じている[4]。五野井隆史は，キリスト教が一般大衆に定着せず知識人に限られており，キリスト教徒自身の自負心の強さが，その傾向を強めていると述べている[5]。佐治孝典は，キリスト教会は天皇制と対決しなかったと述べ，「新しい福音の光に照らして日本の風土そのものを見直し，そこで福音の宣教を阻むエトスそのものと向き合うことはほとんどしていない」と論じている[6]。尾山令仁は，キリスト教はインテリ層により受け入れられてしまったと述べている[7]。金井新二は，日本社会はリバイバルを必要としてはなく，むしろキリスト教会がそれを必要としており，それも「静かに進行していく信仰覚醒」であるべきだと論じている[8]。池上良正は，キリスト教は日本社会への定着に失敗したと結論づけ，その理由はキリスト教受容者層が，第一次産業従事者や都市の平均的勤労者の間に深く浸透出来なかったことにしている[9]。すでに武田清子はキリスト教土着の方法の五つの型を提示している。埋没型，孤立型，対決型，接木（土着）型，背教型がそれであり，日本の教会の多くは埋没型と孤立型に属し，それが挫折に導いたと論じている[10]。これは上記の論点にも共通する。

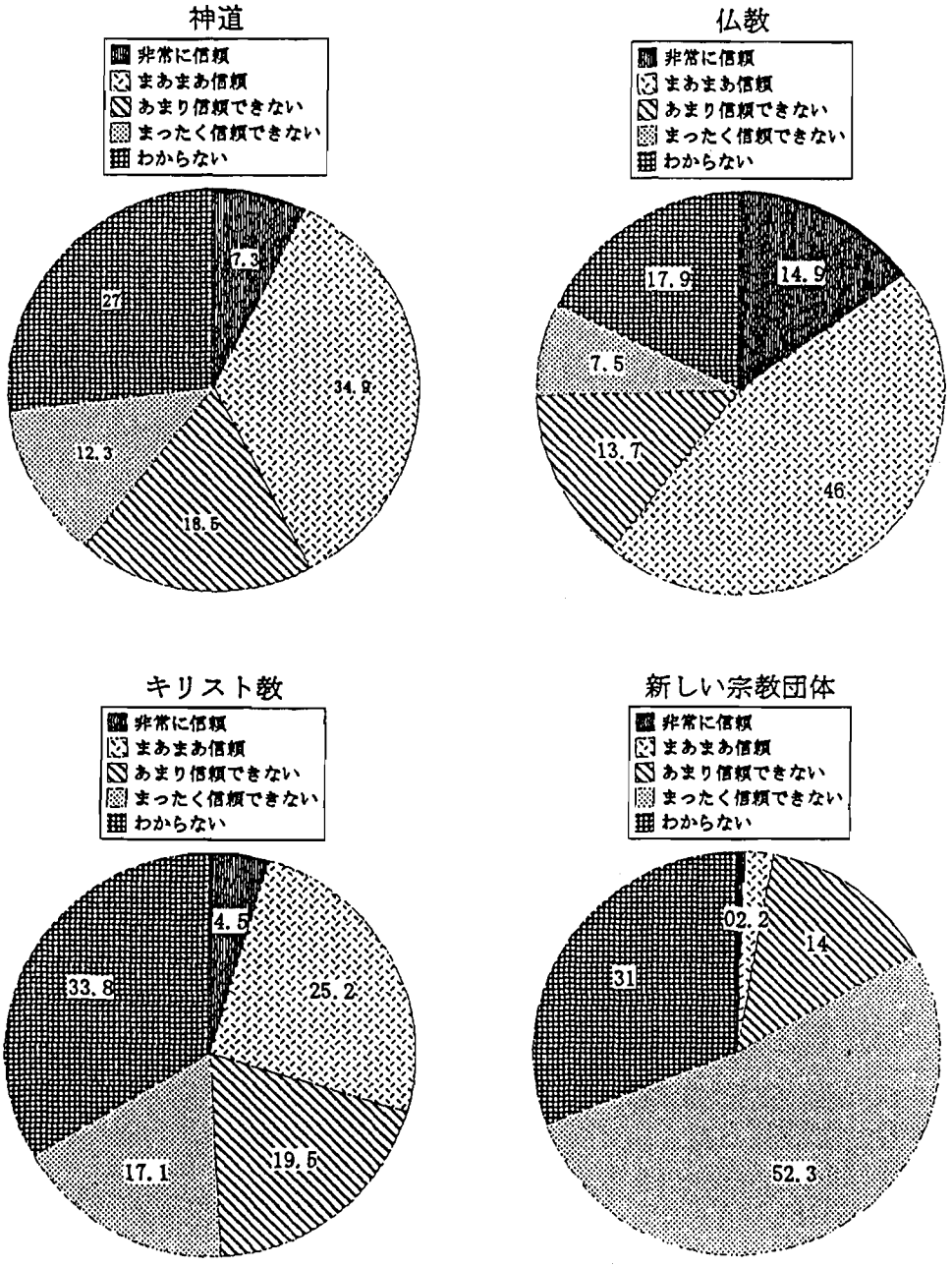
以上をまとめると，天皇制というキリスト教とは相いれない価値体系を有する日本社会に対して，キリスト教会は，これまで妥協するか孤立するかの選択をしてきた。そのために民衆の中に受け入れられず，土着されえなかったということができる。歴史的に見て，キリスト教は，キリシタン禁制以来，政治指導者により「邪宗門」とされてきた。それが，日本人の意識の中に根強く残っている。日本は，神なしに，キリスト教信仰なしにも経済的に発展してきた。そのような自負意識も，今日の状況を説明するかもしれない。

今後，日本にキリスト教が土着するとすれば，そのためにはどのような宣教方法が有効であるのか。

本稿は，これらの問題に対して，日本の宣教の歴史をふりかえり考察するものである。ところで，いわゆる今日の宣教理論の多くは，欧米のものである。必ずしも，それらが日本にあてはまるとは限らない。日本独自の宣教理論は，日本の宣教を歴史的に考察することによって構築できると考えられる。このような試みは，近年にになってようやく着手されたといえる。尾山令仁は，日本における思想の変容と重層性とを指摘して，その背後にあるシャーマニズム的性格が宣教の障害物だと指摘している[11]。尾形守は，歴史，地理，社会その他の観点から韓国のキリスト教と比較しながら，日本の教会成長の要因を考察している[12]。

本稿では，思想史研究をさらに発展させ，一般民衆に視座を設定する。すなわち，知識人よりも民衆の有する思想の観点から分析していく。それは，歴史を動かす力は民衆にあるという前提からであり，特定の思

図1　宗教団体の評価



出展：石井研二『日本人の宗教団体への関与・認知・評価に関する世論調査調査結果』報告書（2000年9月14日日本宗教学会第49回学術大会）

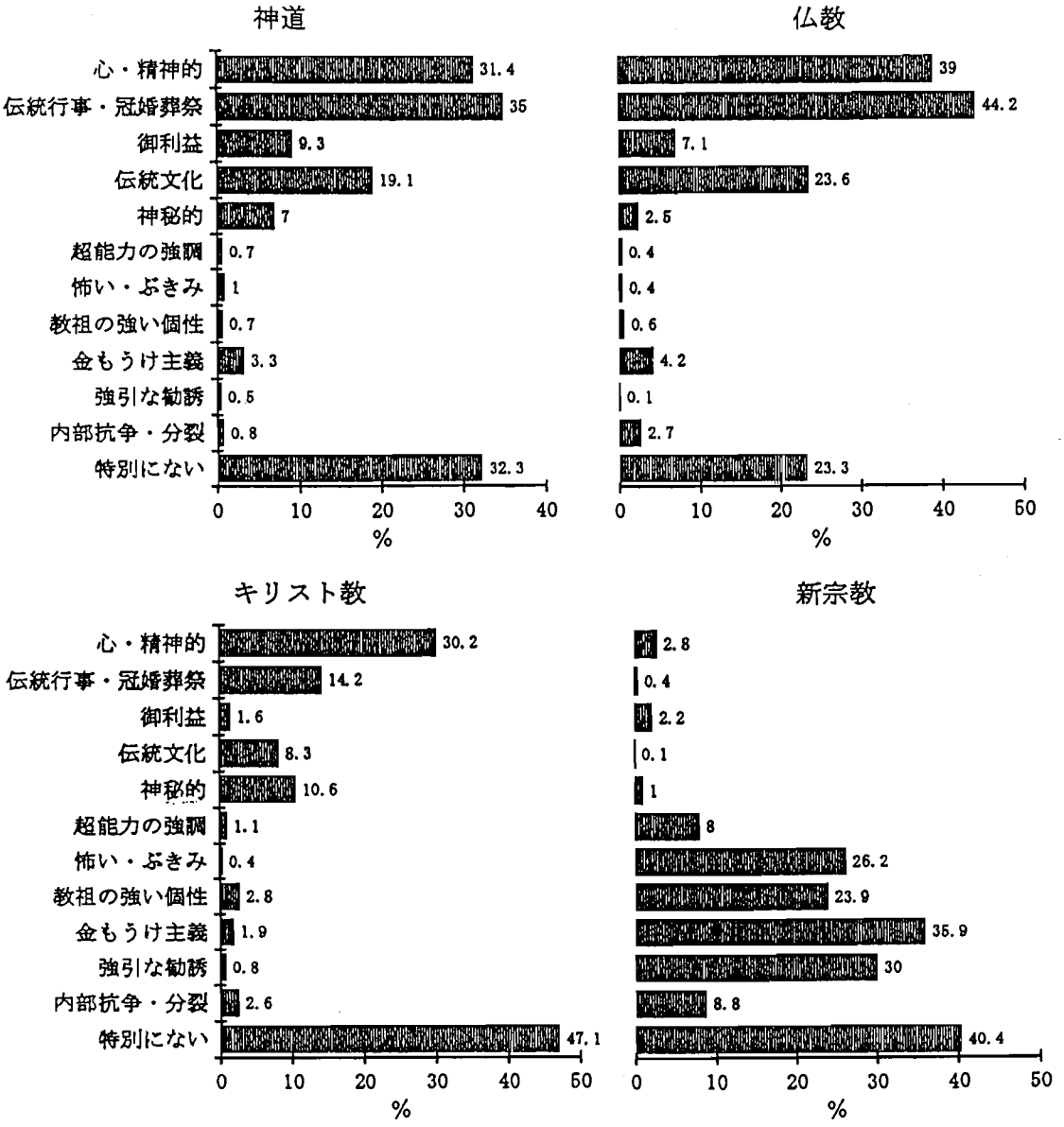
想家や宗教家の思想ではなく，民衆に影響を与えた宣教運動や宣教活動を分析の対象とする。その際，プロテスタントに限定せずに，カトリック，東方教会（正教）の宣教運動も，その対象に含める。

ところで，歴史研究には，大きくふたつのものがある。一つは，綿密な資料分析に基づいて，特定事件を詳細に追求していく研究である。この場合，研究対象は限定される。これは，歴史研究の主流ではあるが，時には，研究対象が過度に限定されて，歴史的ディレッタンティズムに陥ることがある。また，些少主義の傾向をもち，歴史のダイナミズムから外れてしまう危険性がある。

他方，研究対象を広げ，巨視的観点から歴史に隠されている普遍的要素を追求する研究がある。従来の歴史哲学，歴史の理論研究などはこれに類する。この研究では，実証研究に基づくが，扱う時期が一世紀，ないしはそれ以上の，時には一文明を単位として，そこに隠された共通性，法則，普遍性を希求する。

本稿は，16世紀から20世紀にいたる日本のキリスト教史を対象とする巨視的歴史研究であり四世紀にわたる歴史における特徴的なキリスト教宣教活動および宣教運動をとりあげて，特にその宣教の方法と結果を分析し，最後にそれらの共通点をさぐるものである。宣教活動および運動としては，民衆に影響を与えたものを選び，時代ごとに検討していく。なお，元号は時代区分に際して，便宜上，使用するのであり，著者が元

図2　宗教団体に対するイメージ



出展：石井研二　前掲報告書

号表記を支持しているのではないことを付記する。また，本稿において，「宣教」と「伝道」とは同義語である。

第1章　キリシタン時代における宣教

日本における宣教の歴史で，まず，取り上げなければならないのは，キリシタンの時代である[1]。もしも政治的状況が許されていたならば，秀吉以降のバテレン追放令や禁教令が発せられていなければ，確実に日本はキリスト教化されていたと考えられる。

1549年，ザビエルによりキリスト教がもたらされ，キリシタンは発展の時代をむかえた。しかし，1614年の秀吉による全国禁教令から実に1865年にいたるまで迫害と潜伏の時代を経験する。そして，1865年には，キリシタンの復活，1873年の禁教令の停止に至る。

なぜ，この時代において，キリスト教が民衆に広く受け入れられたのであろうか。これについては，いくつかの答えが考えられる。

第一に，この時，日本は時代の過渡期の混乱状態にあり，そういう中，人々は堅固な信仰や明確な救いを求めていたことが，キリスト教受容の原因だと考えられる。奈良時代以来の旧仏教や鎌倉仏教は，新しい社会階層である地方農民や町民の宗教的渇きを満たすことはできなかった。新しい価値観，思想を彼らは求めていた。ザビエル帰来以後，初期にキリスト教に改宗した日本人の多くが，農民や漁民，貧しい町民であったことからも，これは十分に考えられる理由である。

第二に，戦国大名の群雄割拠状態が，キリスト教宣教に有利に働いたと考えられる。各大名は，中央集権的体制を強化するために，何らかの統一的思想を必要としていた。また，軍事を強化するために，ポルトガルなどの武器を求めていた。そのために，キリスト教

とその物質文明を積極的にとりいれようとする状況にあり，それが，キリスト教をうけいれることを結果としたと考えられる。

第三に，思想史の観点からみて，奈良時代，平安時代以来の神仏習合の信仰，さらには，儒仏一致論の民衆への普及が，日本人の宗教観に影響を与え，一神教をうえつけやすい傾向にあったことが指摘できる。とりわけ，唯一神道説を有する吉田神道[2]にみられる天道思想[3]が，キリスト教宣教以前において戦国武士のあいだに普及していた。後に，武士や知識人は，この天道思想を媒介として，キリスト教を受け入れていった。

これらの論点の他，農民や町民は菩薩信仰[4]の延長として，マリア信仰を受け入れたこと，民衆の識字率がかなり高かったために，キリシタンの教えの『どちりなきりしたん』は民衆により容易に理解されたこと，などもあげられる。

このように，キリスト教宣教にとり有利な状況において，どのように宣教活動が展開していったのかを，代表的宣教師を順にとりあげてみていく。

第1節　布教公認時代における宣教

A．ザビエルの宣教

フランシスコ・ザビエル（1506～1552）は，スペインのバスク地方の城主の子として生まれた。イエズス会の修道士となり，宣教師としてアジアへ派遣された。1547年にマラッカにおいて，日本人ヤジローに出会った。その時に日本宣教の召しを受けた[5]。ザビエルは周囲の反対をおしきって日本へわたった。1549年8月15日に鹿児島に到着し，1551年11月まで2年あまりの間，宣教活動に従事した。平戸，博多，山口，堺，京都，豊後が主な宣教地であった。ザビエルは，後に中国に宣教することになる。カトリック教会では「世界布教聖人」とされている。

1．宣教の方法

ザビエルによる宣教の特徴は以下の二点が指摘される。

①．日本文化への敬意

ザビエルは，宣教地である日本と，そこに生きる日本人に対して敬意を抱いていた。日本への愛が彼の宣教の基にあった。それは，以下の言葉からも明らかである。

> どの不信者国民も，日本人より優れている者はないと考えられる。日本人は，総体的に良い素質を有し悪意がなく，交わって頗る感じがよい。彼らの名誉は特別つよく，彼らにとって名誉が全てである……貧しさを恥と思っていない[6]。

②．街頭での説教

ザビエルは，京都に行き，全国布教権を得ようとしたが失敗した。しかし，山口において，領主大内義隆の許可を得て，布教を開始した。彼は街頭に立ち，説教した。

ザビエルの街頭説教は，一日に二度，長時間かけて行われた。町中の様々なところ，四つ辻や人々の集まるところに立ち，そこでカトリック公教要理や，キリスト教道徳をわかりやすく教えた。説教は日本語であった。ザビエルは，通訳アンジローを従え，また，自らも日本語を学んでいた。

説教の内容は，日本人が木や石を神にしている罪，男色の罪，子殺しと堕胎の罪に対する非難であった。さらに，当時，仏教の僧侶が男色の罪を習慣的に犯していたことも批判した。また，霊魂不滅を信じていないが，死者が存在するとして儀式を行うことにより金もうけしている僧侶も非難した。

2．宣教の結果

ザビエルの宣教は，短期間に著しい成果をあげている。街頭説教を行った山口では，二ヶ月後に500人が洗礼を受けた。また，鹿児島では，100～150人，市来では15～20人，平戸180人，豊後30～50人，合計1000人たらずの洗礼者があった。

後年，ザビエルは，日本での宣教経験から，日本への宣教師には，人格と知識とが必要であると述べている。具体的には，苦しみにたえること，自己を主張しない謙虚さ，神に犠牲をささげること，仏教からの迫害にたえる内的経験の豊かさ，哲学と弁証学に達していること，天文学の知識があることなどである[7]。これらの資質は，現在の宣教師にもあてはまるものと考えられる。

B．トルレスの宣教

コスメ・デ・トルレス（1510～1570年）は，スペインに生まれ，イエズス会に入り，メキシコを布教した。その後，ザビエルとともに日本に来て，終生，宣教活動に従事した。彼は，ザビエルの後継者であった。元琵琶法師の日本人改宗者であるロレンソの協力を得て活動した。

1．宣教の方法

①社会活動

トルレスは，天主堂（大道寺）を中心とする救貧活動を展開した。また，1553年には，山口において，喜捨箱を設置して，献金を募った。集まった献金により月に一度，貧民に米を施した。相当な量の米が集められた。また，クリスマスと復活祭の時にも，特別な施米を行った。

②「死者の日」

ザビエルは，日本文化に敬意をもっていたが，トルレスも同様であった。彼は，日本人が葬儀を重視していることを知り，それに即した様々な宗教的応答をし

た。まず，教会において，死者のためのミサを行う「死者の日」を設定した。これは，煉獄の教理にもとづくものと考えられる。また，キリシタン墓地を設営した。そして，葬儀においては，貧富の別なき葬儀を荘厳に行った。これは，日本文化を重んじ，キリシタン信仰の土着化をめざしたものとして評価できる。

1557年，戦乱のために山口教会は解散せざるをえなかった。その後，トルレスは，九州に行き，そこにおいて宣教活動に従事した。九州においても，社会活動が継続された。育児室，産院などを建設して，貧民救済を行った。また，寺子屋のような教育施設を建設して，子供の教育にもあたった。

③支配層への宣教

トルレスは，貧民だけでなく，日本社会の支配層に宣教して，全国的影響力をもつという方針をたてた。

1560年には，将軍足利義輝より，布教許可を得た。その後に，京都，堺，大阪において大名が入信していった。高山右近も，この時，入信した。

2．宣教の結果

ザビエルと同じく，トルレスの宣教も大きな実を結んだ。

有力支配層を信仰に導き，貧民や一般人への宣教は成功した。そして，1561年には，平戸の6ケ所に会堂が建設された。会堂は，以後，各地において建設された。さらに，6人のイエズス会士が8地方において布教活動にあたった。

1569年には，キリシタンの数は2万6500人となり，最初の上昇期をむかえた。（表1参照）

C．カブラルの宣教

フランシスコ・カブラル（1533～1609年）は，ポルトガルの貴族の家に生まれ，1566年にイエスズ会入会し，哲学と神学を学び，司祭，神学校教授，修道院長を歴任して，インド宣教師になった。1568年に，インドから日本に派遣され，豊後地方に10年居住して宣教に従事した。彼は，1570年からは，第2代日本布教長になった。その後，インドにもどった。

1．宣教の方法

①日本文化の軽蔑

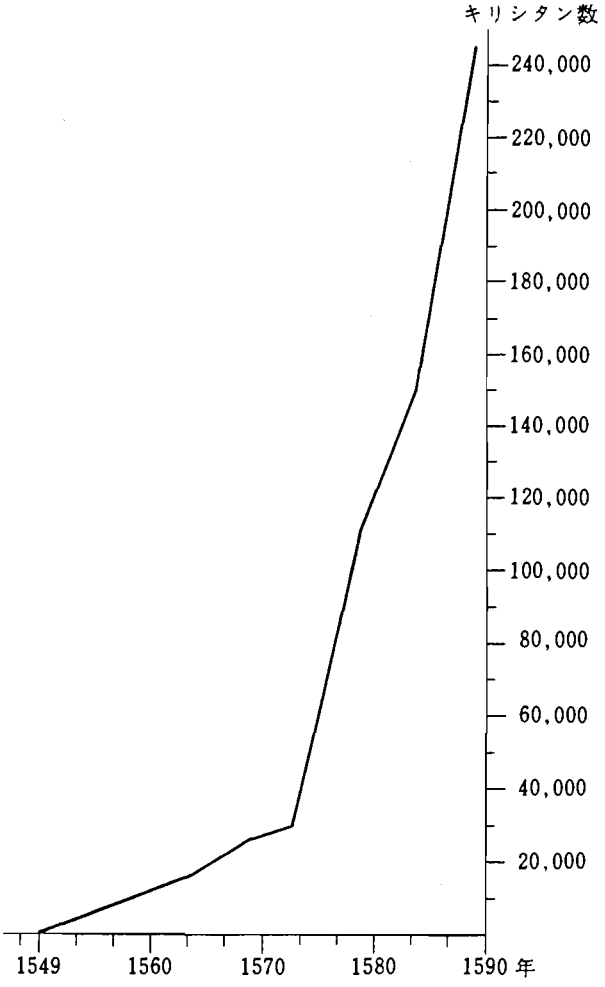
カブラルは，自己過信，名誉欲，党派心の強い人物であった。ザビエルやトルレスとは対照的に，日本人とその文化を否定的に見る立場にあった。日本の政治は野蛮であり，日本人は偽善者だと彼は考えていた。日本民衆への愛と同情を欠いていた。そして，カトリックの為政者として，高い立場から日本人に接しようとした。

②権力による宣教

大友宗麟がキリシタン大名になって以来，支配者が権力的に領民をキリスト教に改宗させる手段がとられた。それは，強制的な改宗であった。

2．宣教の結果

表1　16世紀における改宗者増加数



『16世紀キリシタン史上の洗礼志願期』47頁
笠原一男編『日本宗教史Ⅱ』山川出版社1977年，160頁

政情不安のために，カブラルによる権力的な宣教はほとんど実施されなかった。また，民衆の反発にもあい，教会自体も分裂し，カブラルの宣教は失敗におわったということができる。

D．オルガンティノの宣教

グネチ・サルド・オルガンティノ（1533～1609年）は「貴族の子」であるカブラルとはことなり，農民の子であった。イタリアに生まれ，1566年にイエズス会に入会した。

1．宣教の方法

①日本文化への順応

オルガンティノは，仏教を研究して，日本文化へのキリスト教の順応をめざす布教を展開した。この点，カブラルの宣教とは対照的であったといえる。日本人は外観に動かされやすいことを考慮し，豪華な会堂を建設した。和風三階建ての南蛮寺が，それであった。また，オルガンも会堂に設置した。

②政治指導者による布教の保護

オルガンティノは，織田信長の保護を得て，京都に南蛮寺，安土に神学校を建設した。神学校の建設にはキリシタンである高山右近の援助があった。

③神学教育

1580年5月22日に，安土に神学校（セミナリオ）が建設された。一階は応接室と茶室，二階は司祭の居室であり三階は学校になっていた。8人の神学生が学んだ。彼らは上流家庭の子弟であった。

神学校は，本能寺の変以後，壊滅した。

2．宣教の結果

この時期において，毎年1万人以上の者が洗礼を受けた。「聖なる競争」と呼ばれるほど，宣教は展開していった。しかし，1587年のバテレン追放以後，オルガンティノは，小豆島に避難した。

E．ヴァリニャーノの宣教

アレクサンドロ・ヴァリニャーノ（1539～1606年）はナポリの名門貴族出身である。1566年にイエズス会に入り，インドに派遣された。彼は，東アフリカとインド巡察使となり，1579年に，島原半島に到着した。カトリック教会からは，彼はザビエルに次ぐ偉大な聖職者とされている。

1．宣教の方法

①教会の組織化

1579年7月に，島原半島にヴァリニャーノが到着した。その頃，信徒数は，10万人以上あった。1580年，彼は，臼杵と豊後と安土において，教会会議を開催した。

この会議において，以下の4点が決定した。

・日本の布教区を，肥筑，豊後，畿内の3つにする
・神学校，学院，修練堂を各布教区に建設する
・布教区長は，3年に1度巡察する
・日本人をイエズス会に入会させる

このように，彼は，教会を布教区に統合し，組織的に宣教しようとした。

②日本文化への順応

ヴァリニャーノが，日本人にイエズス会の門戸を開いたのは，日本順応策のあらわれであった。イエズス会では，日本の風習に従うことを義務として，日本語を使用し，衣食住においても日本の習慣に順応しようとした[8]。

また，日本文化を軽蔑していたカブラルを辞任させた。『日本巡察記』には，カブラル辞任に関する以下の記述がある。

第1に，カブラルは，日本人修道士の指導方法につき，彼等は自尊心の高い国民であるから，厳格に取り扱わねばならぬ，とて，彼等を黒人で低級な国民と呼び，他の侮辱的な表現を用いた。

第2に，日本人修道士はポルトガル修道士とまったく異なって取り扱われ，彼は彼等がヨーロッパ修道士のような衣服や帽子を被ることを望まず，食事・睡眠・その他総てのことで異ならしめた。

第3に，彼は日本人を我等の習慣に，そしてポルトガル人を彼等の習慣に順応させるべきではないとした。

第4に，彼は日本の風習を常に親しめぬものとし，これを悪しざまに言った。

第5に，彼は日本人修道士が，ラテン語やポルトガル語を覚えることを許さなかった。

第6に，彼は日本人に大いに悪徳に走る傾向があるとして，日本人のための神学校をつくることを決して許さなかった。

第7に，彼は日本語を，彼等が良く学ぶことができない，少なくとも日本語で説教することは縁遠いものとし，日本語は「文法」によっては判らないものとした[9]。

ヴァリニャーノが行った日本文化に順応した宣教方法としては，日本語による教理や聖書物語を出版したことがあげられる。具体的には，「日本のカテキズム」，「アダムとエバの物語」，「モーゼ物語」，「御主御出生物語」，「御主の埋葬」，「復活劇」などが出版された。これ以外にも，演劇や歌によって聖書の教えをわかりやすく広めた。

③慈善活動

マタイ福音書22章37～40節にもとづき，愛の奉仕活動が実施された。『どちりなキリシタン』には，以下の7条にわたる義務が述べられている。

1には，うえたるものにしょくをあたふる事，
2には，かつしたる人にのみものをあたふる事，
3には，はだへをかくしかねるものにいるいをあたふる事，
4には，病人と牢者をいたはりみまふ事，
5には，行脚のものにやどをかす事，
6には，とらはれ人の身を請くる事，
7には，人の死骸をおさむる事[10]，

1583年より，信仰の維持と布教と慈善活動を行う信心会が発足した。また，長崎において，慈悲屋が開設された。これは，養老院，孤児院，難民救済所として，機能した。さらに，養生屋と呼ばれるライ病院も開設された。墓地の管理，娼婦の救済活動なども行われた。

このような慈善活動は，「ポロシモ（隣人）」と呼ばれ，戦乱の世にある民衆によって受け入れられていった。

④神学教育

セミナリオは，伝道士や日本人司祭を養成する学校であった。20人から30人の生徒が学び，全寮制であった。神学の他に，オルガンや合唱も教えられた。画家や彫刻士，印刷工の養成も行われた。

コレジオは，寺子屋のようなもので，子供に，日本語やラテン語，唱歌を教えた。また，高等コレジオに

おいては，神学，哲学，音楽，美術，日本文学，語学や習俗などが教えられた。

2．宣教の結果

ヴァリニャーノの時には，教会建設が組織的に展開された。その結果，著しい進展期をむかえた。教会による慈善活動は，社会の底辺層にも浸透し，信徒を獲得していった[11]。また，同時に，キリシタン大名の集団改宗も展開していった[12]。その結果，宣教師が不足するほど信徒は増加した。1570年に改宗者は3万人近くであったが，1580年には約4倍の12万人に達している。長崎は「信仰の王国」になった。

信徒は，一日に3回教会に行った。朝のミサに出席し，帰宅し，正午に教会に行って「どちりなキリシタン」を使用して学んだ。聖歌も歌った。帰宅して，夕方には祈るために教会に行くのが習慣になっていた。

第2節　禁教下における宣教

1587年6月に，秀吉は全国を制覇した。そして，バテレン追放令を発した。また，キリスト教会内においても，党派間の争いが生じた。すなわち，1592年に布布教を開始したドミニコ会と，翌年に布教を開始したフランシスコ会との間の争いであった。1597年には，フランシスコ会の26名が，長崎において処刑された。徳川家康もまた，1612年と1616年以後にも禁教令を発した。300年にわたる禁教の時代において，いかなる宣教活動がなされていったのであろうか。

A．宣教の方法

1．信徒の小集団

ヴァリニャーノは，コンフラリアを組織することを命じた。これは，新約聖書の使徒行伝2章43～47節と6章1～6節にもとづく信徒の小集団であった。信徒による牧会，布教，信仰の維持を目的としていた。

1592年に大村において組織された「サンタマリアの組」が，この最初のものとされる。他には，「サクラメントの組」，「お告げの組」，「ミゼルゴルジヤの組」なども組織された。元来，これらは，慈善活動を目的としたものでもあった。

「サンタマリアの組」を例にとると，構成員は，青年男子とその妻子であり，小組は50人，そして，大組は500～600人より成っていた。さらに，親組は，一地方にわたって組織されていた。小組の指導は大親と小親によってなされ，だれがなるかは談合によって決められた。他に，慈善役，分配役，伝達役などの係もいた。信徒の家庭において，彼らは集会を開いた。集会においては，ミサと祈りと講話がなされた。

島原の乱において見られた信徒の堅い団結や，隠れキリシタンとして長く信仰が維持できたのは，これらの小集団の存在にあったと考えられる。

2．日本の習俗との混合

コンフラリアは，日本の伝統的家族制度と地方制度とに結合するものであった。そのために，コンフラリアは，地縁に組み直されて，存続した。このような日本の習俗との結合状況は，キリシタンの信仰にもみられた。たとえば，マリア観音や納戸神がそれである。土俗宗教の神道や仏教とキリシタン信仰との結び付きが，この禁教の時代において展開していった。

B．宣教の結果

1．隠れキリシタン

公的には，キリスト教信仰が禁止されたために，信徒は隠れて信仰を保持しなければならなかった。「転び」が多く見られた。まず棄教したのは，武士や知識人であった。領主が棄教すると，領民も集団的に棄教した。しかし，最後まで棄教を拒否したのは，農民と漁民であった[13]。

キリシタンは宗教的祭日や安息日には労働を休むために，農業や漁業を営むことは消極的にならざるをえなかった。したがって，キリシタンの農民と漁民の多くは貧しかった。

2．キリシタニズム

バテレン追放令以後，宣教師はほとんどいなくなった。そのため，正しい教理を教える者が不足気味であった。その結果，非キリスト教的な思想や習慣がキリシタン信仰に浸透することになった。たとえば，受洗名簿である「水帳」への信心，また，本来は「主の祈り」からなる公的祈りである「オラショ」が，民衆の間では一種の呪文になっていたこと，などがそれである。

隠れキリシタンの中でも「はなれ」と呼ばれた者たちは，五島列島や黒崎などの辺境の地に生活していたために，このような土俗信仰との結合が他より強く見られた。たとえば，「納戸神」は，箱に入れられて納戸にしまわれており，一年に数回取り出して礼拝するものであった。「おやど」，「つもと」と呼ばれるお番役が，納戸神を保管した。「納戸神」の多くは，「ごぜん様」と呼ばれる聖画や画像に描かれた。また，「お礼」と呼ばれるロザリオの15玄義を墨で書いた小さな木札や，「おみず」と呼ばれる殉教地において採集された「聖なる」水，「おてんぺんしゃ」と呼ばれる縄製鞭，「おまぶり」と呼ばれる十字架の紙片，「たもと紙」と呼ばれるロザリオもあった。

このように，キリシタン信仰が，神道や仏教などの土俗信仰と結合した状態がキリシタニズムと呼ばれるものであった[14]。

第3節　結論

キリシタン時代のキリスト教宣教の方法と，その結果について，以下の点が結論として指摘される。

1．日本文化を尊重した宣教師が，積極的にそれを受け入れたことが，宣教の成功につながった。逆に，日本文化を軽蔑していた宣教師は宣教に失敗した。したがって，日本の生活習慣に適応して，さらには

日本人聖職者を教育，養成して，彼らに宣教の責任をもたせていくことが，宣教の成功に大きく影響したということができる。

2．民衆が必要としていた様々な慈善活動を，宣教の一環として実行したことが，宣教の成功につながった。貧しき民，「小さき者」への助けは，キリストの教えの実践であり，慈善活動が，貧しき民の心をキリストの教えに開かせる要因となった。

3．宣教師が政治指導者からキリスト教宣教の許可を得たことが，有利に働いた。政治指導者が，さらにキリスト教に改宗すると，領民たちの集団改宗が行われた。しかし，政治指導者が禁教令を発すると，急速に強勢は弱まった。政治指導者とキリスト教との関係が，宣教の成否を大きく左右することがわかる。

4．聖書や教理を正しく教えるために，神学校を設立して神学教育を重視したことは，宣教活動の継続に大きな効果があった。神学教育がなければ，宣教活動は途絶えたと考えられる。

注

序章

(1) 2000年における日本のキリスト教人口は，信徒と教職を加えて109万4706人であり，人口の0.86%である。プロテスタント59万2924人，カトリック46万4725人，正教2万5713人である。『キリスト教年鑑』2000年版。

(2) 日本宗教学会第49回学術大会（2000年9月14日駒澤大学）における研究報告「日本人の宗教団体への関与・認知・評価に関する世論調査調査結果」を参照。この調査は文部省の以来によるものであり，対象者は住民基本台帳による満20歳以上の男女2千人（167地点，層下二段無作為抽出法），実施方法は個別面接聴取法（官製葉書による事前協力状送付），有効回答数1345人（67.3%），回答者内訳は，男45%，女55%20歳代11%，30歳代17%，40歳代19%，50歳代21%，60歳代33%，13大都市23%，その他の都市54%，郡と町村23%であった。同5頁。

(3) 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』新教出版社，1989年，139～140頁。

(4) 小野静男『日本プロテスタント伝道史』聖恵授産所出版部，1989年，143頁。

(5) 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館，1990年，308頁。

(6) 佐治孝典『土着と挫折—近代キリスト教史の一断面—』新教出版社，1991年，8頁。

(7) 尾山令仁『日本人とキリスト教の受容』羊群社，1995年，192頁。

(8) 金井新二『現代宗教への問い』教文館，1997年，91頁。

(9) 池上良正「民俗・民衆宗教としてのキリスト教の文脈化—沖縄県の聖霊運動を手がかりとして—」『日本人はキリスト教をどのようにして受容したか』日文叢書，国際日本文化研究センター，77頁。なお古屋安雄『日本伝道論』（教文館，1995）にも同様の議論がある。

(10) これら5つの型は以下のように定義されいる。

埋没型：妥協による埋没

孤立型：非妥協の孤立

対決型：日本の精神的伝道に内在する古い価値，古い規範のうち，キリスト教の真理と対決し矛盾する要素を選び出し，それと対決することによって土着しようとする戦闘的タイプ

接木型：土着型とも呼ばれ，日本の精神的伝統に内在する諸価値の中に積極的可能性を潜在させた萌芽と考えられる要素を選択し，そこにキリスト教の真理を受肉しようとする試み

背教型：キリスト教を捨て，あるいは，教会に背きいわゆる背教者となること，あるいは，そのことによって逆説的にキリスト教の生命の定着を求める

武田清子『土着と背教』教文館，1967年，3～14頁。

(11) 尾山令仁，前掲書。

(12) 尾形守『日韓教会成長比較—文化とキリスト教—』ホープ出版，1997年。

第1章

(1) 近年，ザビエル以前の日本において，すでにユダヤ教やキリスト教の一派である景教が移入されていたとする議論がある。これは，日本の遺跡，習慣，言語表現，建築物，装飾品などが，それらと類似していることを根拠とする議論である。ただし，日本の宗教学会や日本民俗学会においては，資料不十分なために取り上げられていないが，興味深い議論である。厳密な資料分析による確認が待たれる。以下を参照。ケン・ジョセフ『隠された十字架の国・日本』（徳間書店，2000年）：久保有政『聖書に隠された日本・ユダヤ封印の古代史』（徳間書店，2000年）

(2) 室町時代末期に京都の吉田神社の神官吉田兼倶が唱導した神道の一派であり唯一神道とも呼ばれる。唯一の神を主張する。天地に先立ち，陰陽を超越する存在として神を位置付け，森羅万象は神のみわざであり，一切の現象は神道にかなうものであるとする。儒教，仏教，陰陽道などを融合した神道説として後世に大きな影響を与えた。『日本史広辞典』（山川出版社，1997年）

(3) 人間の運命や時世の推移を天の動きとみる思想。人生と歴史を因果応報的に支配する超越的主宰者を観念して，運命打開の契機となる神秘性と，支配権力を理念付け秩序の安定を要求する倫理性を合わせ持つことから，戦国大名の果敢な生き方を支える側面を持っていた。『岩波日本史辞典』（岩波書店，1999年）参照。吉田神道とは別に，海老沢有道は，浄土的救済観を媒介として，キリスト教の救済観が民衆に理解されたと論じている。海老沢有道『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局，1970年）19～20頁。

(4) ブッダにいたる前段階にあり，みずから精進努力してそれを求めながら，一方では衆生を救済する存在として信仰される。大乗仏教の展開の中で，数多くの菩薩が造られた。宝冠や胸飾りなど様々な装飾を施された貴人の姿を基本とする『日本史広辞典』

(5) 「日本人は，みな不信者である。そこには同教徒もユデア人もゐない。克己心が強く，神やその他の自然の事物に就いて，非常に知識を求めてゐる。イエズス會員たる私達が，その活動によって結ぶことのできる成果は，日本人の自力で培はれて往く希望がある。以上のような理由により，私は非常に深い慰を以て，日本に往くことを固く決意した。——中略——日本はキリストのために，よく獲得することができるといふ大なる希望が，我等の主なる神に於て，私に満ちてゐる」以上が，1549年1月12日に，ローマのイグナチウス・デ・ロヨラにあてて書いたザビエルの書簡にある日本宣教の決意の内容である。『聖フランシスコ・デ・ザビエル書簡抄』上巻，岩波書店，1991年，

311頁。

(6) 同，下巻，26頁。

(7) 「日本へ繰る神父は，また，日本人のする無数の質問に答えるための学識を持つことも必要なことである」同，193頁。

(8) ヴァリニャーノによる日本順応策としては，ローマ字・日本文字の学習や音楽の習得に関することをはじめ，衣食住にかかわる日常生活についてまで規定されていた。また，以下の9点が会議において決定された。

1．日本を準管区としてゴア管区より分離させること
2．長崎・茂木の寄進を受理すること
3．日本準管区を下・豊後・都の三布教区とる
4．神学校を各布教区に設置すること
5．日本人聖職者を養成すること
6．日本人をイエズス会に入会させること
7．在日イエズス会の絹衣着用に関すること
8．同宿等の処遇に関すること
9．日本イエズス会年報のこと

笠原一男編『日本宗教史Ⅱ』（山川出版社，1997年）159頁。

(9) 同，156～157頁。

(10) 同，163頁。

(11) 1583年に書かれた『日本諸事要録』によれば，信徒数は，下布教区で11万5千人，豊後で10万人，都で2万5千人であった。同，160頁。

(12) 宮崎賢太郎は，この当時のキリシタン大名による領民の集団改宗は強制的なものであったと述べている。宮崎賢太郎「日本人のキリスト教需要とその理解」『日本人はキリスト教をどのように受容したか』（国際日本文化研究センター，1998年）177頁。

(13) 武士層や知識人層の改宗の動機には，非信仰的である，政治的，経済的，思想的なもの，自然科学に関する知的関心などがみられるが，民衆の動機は生活に根差したものであった。同，181頁。

(14) 宮崎賢太郎は，キリシタン時代，日本人はキリスト教を新しい威力ある宗教として在来の信仰にプラスワンしたと否定的見解を提示しているが，同時にキリシタンが再渡来した宣教師と接触したあと急速に正統的なキリスト教に目覚めたという事実も提示して問題提起している。同，206頁。

（平成13年9月10日受理）